

鳩山内閣発足から3ヶ月、近頃は普天間問題(日米関係)、子供手当で、ガソリン税暫定税率などマニフェストからの「ぶれ」、「違反」、「後退」等と左右から叩かれ、鳩山首相の指導性が盛んに言われますが、50年続いてきた官僚に乗った自民党政権からの転換ですから、上手く行かないことが多いのは当然で、右にぶれたり左にぶつかったりも当然です。行政刷新会議での事業見直しなど期待ほどには額には達しなくとも、オープンであるような議論が行われたのは我が国始めて以来、どれほど国民の政治的関心度を高め「床屋談義」を巻き起こしたことかと評価したいです。ところで「スーパーコンピューター予算1800億？」の事業見直しで「世界第2位ではいけないのですか」という質問が面白かった。実際現在は確か日本のスーパーコンピューターは世界第2位の筈です。それによる削減決定に野依良治以下6名のノーベル賞受賞者が登場して抗議したのには驚いた。いやこういう抗議が出るのも、この「事業見直し」の想定するところで、このイベントの良いところですが、これまででしたら野依は首相官邸に陳情して国民の関心など呼ばずに終わりでしたでしょう。こうして野依がすさまじい怖い顔してテレビカメラの前で「この予算を削除した者は後世歴史の審判を受けるであろう」等と大上段に宣わねばならなかったなど素晴らしいではないですか。これで判ったことはノーベル賞受賞などの理化学的偉業は本人のご努力もさることながら1000億2000億の血金が必要だということです。野依らも「理化学研究」の権化のように登場し威張ることではなく、科学者として謙虚に国民に血税の投入を願わねばならなかったということです。そして科学者も常日頃から「派遣労働者の切捨て」等にも抗議する普通の良識人であってほしいものです。向井拓治